



# 家づくりから始めた 新米養鶏家の七年

まっとうな食べものを口にしたい！

今井さん夫妻が大阪を離れて7年がたつ。教師という職業、そして生きることの根幹にある食べものが軽視されている生活に、疑問を抱いてのことだった。家づくりから新生活をスタートした今井さん一家が手にした暮らしとは、どんなものなのだろう

「これ、食べるんよ」

末っ子の美木子ちゃんが、そばに生えている草をちぎって鶏にさした。勢いよく葉をつつく鶏。ここで生まれた美木子ちゃんは、鶏が好む草をちゃんと知っている。小さい頃から遊びのなかで自然に覚えた知識が、身につけているのだ。

兵庫県千種町岩野辺(約二百二十戸)という集落で自然卵養鶏を営む今井さん一家が、大阪からこの地に移住して七年がたつ。大阪にいるとき、和夫さん(37歳)は社会科を、妻のひさ代さん(39歳)は英語を教える中学校教師だった。

「いちばん上の子がアトピーだということもあったんですが、自分でつくった納得できるものを食べる暮らしがしたかったです。それに、詰め込み教育や偏差値偏重教育に疑問がありましたから。どうも教師には向いていないみたいでした」

お金がないなら  
セルフビルド

思いついたら実行は早い。ふたりは八八年三月末に退職、和夫さんは子育てに手がかかるひさ代さんを家に残し、将来の就農に備えて藤井寺市にある農家の実習生になった。並行して移住地探しも開始、和歌山や三重などに足を運び、最終的には地元其自然卵養鶏家の誘いもあって千





## Profile

### 今井和夫さん・ひさ代さん

今井和夫さん(兵庫県出身・37歳)、ひさ代さん(大阪府出身・39歳)は、ともに元中学校教師。89年に兵庫県千種町に移住した。この春、長女・絵美子ちゃんは小学校5年生に、次女・七菜子ちゃんは2年生になる。千種町で生まれた「田舎の子」三女・美木子ちゃんも4歳になった。

卵養鶏だった。幸い移住のきっかけをつくってくれた養鶏家の口ききで、ほどなく約九十坪の土地を借りることができた。問題は家である。業者に家を建ててもらおうとなると大金がかかる。そん

借りて自給用の米や野菜をつくるかたわら、建設作業などの日雇いの仕事で現金収入を稼ぐ日が続く。だが今井さんがめざすのは一人前の農家。それも実習生時代を通じて検討した結果、現金収入につながりやすく、経営が安定していると判断した自然卵養鶏だった。

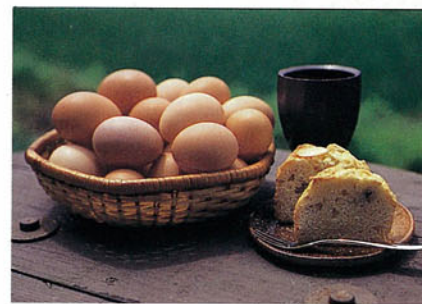
とうとう初雪が降ってしまふ。まだ屋根がなく、二階の床を張っている段階だった。雪に閉ざされる冬場は作業ができない。正味八カ月のセルフビルドが終了したのは、翌年八月

一家で移り住んでからは、田畑を借りて自給用の米や野菜をつくるかたわら、建設作業などの日雇いの仕事で現金収入を稼ぐ日が続く。だが今井さんがめざすのは一人前の農家。それも実習生時代を通じて検討した結果、現金収入につながりやすく、経営が安定していると判断した自然卵養鶏だった。

種町に移り住むことになった。八九年四月のことだ。千種町に決めてからは、役場に空家に住めないか相談を持ちかけたが、まずは町営住宅に住んでみるよう勧められる。空家が見つからないのに加えて、役場としては、たんなる「種町移住」で早々に町を出ることになっては双方にとってよくないと考へもあつたようだ。

「本にある通りに図面を引いて、寸法通りに切っていくだけ。まあプラモデルみたいなものですよ」こともなげに言う今井さんだが、経過を聞いてみると、けっして楽だったとはいえないようだ。今井さんがセルフビルドしたのはツーバイフォー工法の住宅。八月中は下調べと材木調達に費やし、九月になって、いよいよ家づくりを開始した。和夫さんの父親も駆けつけた。思いのほか大変だったのが、基礎工事。建築予定地までの道があまりにも狭く、ウンボやミキサー車はおろか軽トラックすら入らない。頼れるものは人力のみである。家族みんなで日に何度も運び、およそ二カ月かかった。そして、十一月二十日には

**教**師から農家に転じた今井さん夫妻。「自分でつくった納得できるものを食べる暮らし」をめざしての移住だった。



**飼**料にトウモロコシを使わない今井さんの卵は、黄身が白っぽいのが特徴。子どもたちの好物の卵ケーキには欠かせない。

### 頼れるのは 人かのみ

な余裕は今井さんにはない。かといって六畳と四畳半の町営住宅は、一家四人、ときには和夫さんの父親が訪ねてきて五人にもなる今井家にはいかにも狭い。ではどうするか。今井さんは我が家をセルフビルドしようと考えた。





**小** 高い丘の上に建つ今井家は、基礎からのセルフビルド。一家総動員で8カ月かかった。



**吹** き抜きの2階からリビングを見下ろす。玄関を入れて間仕切りがあるのは、お風呂とトイレだけ。



**物** は最小限に留めてはいるが本は多い。小さな家では、階段下も大事な収納スペースだ。名付けて「階段文庫」。

### セルフビルドの「目に見えないコスト」

セルフビルドの費用は総額600万円ほどだった。しかし、はたしてこれが安いのかというと、今井さんは判断がつかないという。1年近くこれにかかりっきりで、仕事ができなかったからだ。「仕事をしていたら入ってきたであろう収入」は、セルフビルドに長い時間をかける場合の「目に見えないコスト」といえる。



**赤** い屋根と大きな窓がこの家のシンボル。中2階は子供部屋兼みんなの寝室。





**家** を建てたお父さんの影響か(?)、3人がつくった紙の家。電灯に掛かっているのは蛇の皮。ちょっとしたアクセサリだ。



**卵** 集めは子どもたちの仕事。4歳の美木子ちゃんも、今井家の立派な労働力である。(今井カントリーファーム ☎0790-76-2618)



**家** が完成したときみんなで背比べをした柱の傷は家族の記念。子どもたちの背丈は、日を追うことに父母に迫る。

**卵** が山盛りの食卓。お手伝いのついでにガブリ、「おいしいよ」。



「自分の仕事として責任持ってやっていますよ。初めは、たどお小遣いをもらうより、自分で働いてお金を手にするほうが、子どもたちにとってもいいかな?、というくらいの気持ちだったんですが、今ではすっかりアテにしているんですよ」  
特別に自家配合した餌で育てた鶏

百羽から始めた養鶏だが、現在ではヒナを入れて八百羽にまでなった。毎日の餌やり、鶏舎の掃除と、仕事は多い。おまけに、大事な鶏を狙ってイタチ、熊などの招かざる客もあ

### 子どもは立派な働き手

「このあたりに適当に布団を敷いて、みんなでごろ寝するんですよ」  
「さもおかしそうに語るひさ代さん。間仕切りがあるのは、風呂とトイレくらいのもの。開放的な空間に今井さん夫妻の人柄がうかがえる。」

断熱材をふんだんに使った家は、八〇センチの積雪時でも寒さ知らず。小さなファンヒーター一つで充分だという。一階は二十一坪、吹き抜けのリビングと、ダイニングキッチン。二階の十坪は子供部屋だが、一家全員の寝室でもある。

だった。





家の周りは天然のお花畑。長女・絵美子ちゃんを先頭に、背丈を超える草むらを駆けめぐる三姉妹。

の卵は、コレステロール値が非常に低い。ごく一部の店頭販売を除いて、ほとんどを宅配便で直販している。「アトピーの子どもでも大丈夫だった」という声も聞かれ、顧客は他府県にまで広がっている。

収入は、一家五人が生活していくのに必要だと和夫さんが考える月額二十万円を、「どうやらクリアできているかなあ?」といったところだそう。

### これからは 「一緒に住もうよ」

今井さんは農作業の合間をぬって、子どもたちに特技の空手を教えている。そうしたなかで、ここには都会とは違う課題があることに気づいた。「町には図書館がありません。文化的な施設が少ないんです」

今井さんはまず、集落の公民館に開架式の本棚を設置しようと呼びかける。昨年四月から、同世代の有志が集まって本集めを開始、ユネスコから贈られた百冊に、地域の人や友人知人の寄付が加わり、現在では七百五十冊ほどにもなった。名付けて「岩野辺ロマン文庫」。

文庫の開設から思わぬ副産物がうまれた。いくども集まりを重ねるうちに、腹を割って話せる友人が徐々に増えていったのだ。大人も子ども、都会の影響や忙しさにまぎれて

田舎の豊かさを味わっていないのではないか。豊かな人間関係が失われつつあるんじゃないか。できることからやってみよう。やがてそんな意見が交わされるようになった。

手始めに、昨年、キャンプファイヤーやウォークラリー、星を見る会などを催した。子どもだけでなく大人にとっても楽しいイベントだった。そんなこともあって、今では地元の人からも、こんどはあれをしよう、これをしよう、次々にアイデアが飛び出す。「千種町の産物を使った学校給食ができないかな」。もちろん今井さんにもやりたいことがある。それは、教師をやめ、自然卵養鶏の道を選んだ今井さんの夢でもある。

「たいそうな目的を掲げるのではなく、自然体で子どもと一緒にここで暮らしが楽しめる、そんな雰囲気」が広がればいいな」

千種町はスキー場やゴルフ場などの観光資源が整っており、都市部から数多くの観光客が訪れる。だがその一方で若者たちは町を出て行く。生まれ育った地を離れていく。

千種町のキャッチフレーズは「遊びにおいてよ」だが、今井さんは、これからは一人でも多くの子どもがここに残りたいと思うよう、「一緒に住もうよ」に変える時代ではないかと考えている。